

基調講演「保育の質を考える：外の目 内の目」秋田喜代美氏

半年、今年になってからですが、レジュメを先に配らないということの方針にしておりまして、白い紙をお配りさせていただいております。全部写す必要はありません。ご自分の心に残ったこと、大事なことを、ちょっとメモをしておいていただく。後で不安に思われるといけないので、ポイントのレジュメはお帰りに持ち帰っていただくんですけれども。先に配ると、もう全部終わりまでザーッと見て、あと寝るとかいう人もいたり。安心とか、あと穴埋めにされる先生もおられるんですが、私の中身は、多分穴埋めにするような話でもないで、そんな形で、今日は申し訳ありません。先に資料を配っていないという、この頃は方針にしておりまして。ノートテキングをいかにやるか、それが重要なんじゃないか。それは、保護者の方や、いろんな方に、人に、「私はこれを聞いたよ」って伝えるためのワードメモでも大事かなと思ってやり始めていることです。

今日は、『保育の質を考える：外の目 内の目』という形でお話をさせていただきます。保育の質が、まさに議論されるようになったのは、この県立大のこども学科が 30 周年ということですが、世界的に見ると、1980 年代です。福祉の中で、福祉をサービスとして呼ぶようになり、質ということがそのキーワードになったのは 1980 年代からになります。その中で、質というものがいろいろな形で議論されるようになってきました。今日は、私が出会った、教えていただいている、私は実践をしたことがないので見せていただいたり学ばせてもらった事例をご紹介しながらお話をさせていただきます。

それから、『Cedep』と私どもは呼んでおりますけれども、東京大学に昨年の 7 月ですけれども、「発達保育実践政策学センター」を立ち上げさせていただきました。これは、学術会議というところで、なぜ、乳幼児の学問だけが学問としてきちっと認められていないのか、という問題提起をし。これからの社会科学で一番重要なことの 1 つは、保育を、別に保育学だけじゃなくて、乳幼児期の子どもの幸せ、それは、人の最初期からの幸せ、それを支える家族、また、その職場で働く人たち、みんながどうやったら幸せになれるのかを、きちっと考える学術研究が必要ではないか、というふうに訴えました。そうしたセンターは、世界にはあるのに日本にはどこにもなかった。それで、お願いをして、総合大学なので、東大につくっていただき、いろんな大学とネットワークをつくり、また、国立教育政策研究所にも、今年の 4 月に、幼児教育センターができて、そことも共同していくことになります。

今日のトピックです。質という時に、客観的に保育の質を捉えるという動きはあります。しかし、もう一方で、私の今日のポイントは、結局保育の質って、まさにその場で、これ、幼児教育も入っています、当然、子どもやその園の人にとって、地域の人にとって、意味ある保育を、やっぱり内側から考えることが、質で一番大事なはずですよ、ということを、お伝えしようと思っています。また、この頃、私がいろいろな所で講演をさせてい

ただく時にお話ししているのが、園のリーダーシップという考え方です。これは、誤解がないようにお話をしておけば、園長のリーダーシップではありません。園長も主任も、いろんな方が大事ですけども、職員全員の一人一人のかけがえのない強みを生かすということが、園のリーダーシップということを、私どもは申し上げます。

ご存じかもしれません。来年度から、保育士の処遇改善とセットになって、保育士の数年目以降の方のミドルリーダーのための研修が全国でこれから打たれることになります。その中で学んでいただくことの 1 つが、これから、例えば乳児担当、幼児担当、障害児、例えば保護者支援、それぞれに、少し専門性を持った方たちの研修をしたり。そこでのミドルリーダーっていうもの、それは園長先生や主任の下ですが、みんながそこで引き受けて合って、リーダーとして頑張ろうっていう、そういうリーダーシップです。

従来、学校教育では、校長がトップで、管理職から厚く、階層型のピラミッドが考えられてきました。しかし、保育は違うと思います。みんなの力で、いろんな職員の人が手に取り合って生かしていく、そういうリーダーシップを考えたいと思っております。その 3 点をとても抽象的な話から入ります。

保育の質って何か、世界的には、子どもたちの **well-being** っていう、よりよくあるという英語ですね。これ、福祉とか安寧って訳しちゃうと、ちょっと感覚が違うので、**well-being** としていますが、子どもがハッピーでより良い生活になるための環境と経験の特徴です。どんな方向の志向性、何を乳幼児期の保育教育で大事にしますか。じゃあ、そのためには園の施設の広さや、それから、1 人当たり、クラスの定数や、当然 1 人当たりの、誰がどのように担当しますかとか、どういう実践をしますか、具体的にどのように関わりますか、そのために、どういう管理運営をしていますか。それによって、子どもに何が育つのでしょうか。こんなさまざまな側面が、質として語られてきています。この辺は、写さなくても、レジュメで戻りますから、大丈夫です。

私が気に入っているのは、これ。「幸福」って何だろう「**well-being**」。OECD がいっています。一人一人の子どもの幸せ、これ、『貧困と保育』という本の中に書きましたけど、それは、やっぱり保護者も当然です。健康、ワーク・ライフ・バランスになっていますが、ワーク・ライフ・バランス。要するに、親が親として、と同時に例えば職業人として、そのバランスをうまく取れること。これからの社会に必要な教育とそのスキルを持っていること。そして、社会的な絆をつくっていく。そして市民として、社会生活に関わっていく。そして、環境の質や安定することで幸せになる。こういうことが、サイクルとして生まれるようにしていくことが大事です。

しかし、ご存じのように、日本は相対的貧困率では、世界のワースト 4 ぐらいに入るほど、貧困の格差は見えない形で大きくなっていますし、後でもお出ししますが、日本ほど 20 代の保育者の割合が 6 割と高い国は、他には、韓国、トルコ以外にありません。みんな、生涯に働き続けていけるだけの処遇と専門性というものを持っています。それに対して、

日本では、やはり手応えを感じて、保育の面白さを感じても、そこがうまく仕事として続いていくような園の形になっているのか。それが考えられなければいけないかもしれません。大学の講義みたいでしょう。最初は15分ほどお付き合いください。

保育の質は、世界的に言われていることです。本当に最低基準、守られなければいけない。そこは、構造の質といって。もう、私は、これも保育所の専門性が、保育士だったり、幼稚園教諭の保育教諭が担当すべきところと、今、ご存じのように、いろんな補助的な役割が生まれてきていますよね。この辺りも、国によって、その最低の基準というのは違うわけですから。それを、やっぱり最低限、子どもと保育者の秘密とか、それから、例えば乳児でも、保育士と子どもの比率だけじゃなくて、1クラスの担当の大きさをどうするかというの、子どもの落ち着きには大きく違いが出てきます。こういうことが向上の質といわれるものです。

これが、イギリスや海外では外部評価というのがあるので、普通の園、いい園、すごくいい園、こういうふうには外部評価が入る。これ自体は、私はいいいことだと、あんまり思っていない。でも、参考になるなと思うのは、やっぱり、今日お越しの方は、多分、ここはクリアされてるから来られているんだと思うんですが。そういう園では、やっぱり保育者が、さらに専門性を研修を託して、誇りを持っていくことが大半です。日頃から、いい保育を、たくさん皆さんされてると思うんですけど、ちょっと見直して、リフレッシュしたり幅を広げたりしていく。そういう研修が大事です。さらに良くするには、さっきお話ししました、ある程度継続勤務しているということが非常に重要だということも分かっているわけですから。やっぱり、もっとこの職場で働きたいと思えるということは、すごく大事なこともかもしれません。

子どものセンターで離職の理由というのを尋ねました。そうしましたら、私立幼稚園、幼稚園の先生は、寿一結婚で辞められる、から、出産で辞められるというようなライフコースをお持ちの方が、結構多いです。それに対して、例えば認可外保育所の方は、認可保育園に移るといった転職が多いです。それから、一番定着が高いのが公立の保育園でした。

私たちは、みんながもっと手応えをもって、子どもがより良く育ち、それを一緒に「良かったね、あの子どもが大きくなったね」って語り合えるような保育にするにはどうしたらいいのか、ということを考えてと思います。じゃあ、子ども・子育て支援新制度が進み、わが国の保育は良くなったのでしょうか。私たちのセンターは、それを1つ、国が良くなったと思って言っているの、第三者の機関から客観的に調べてみるということ、いろいろしております。

子ども・子育て支援新制度施行後、自治体と取り組みは、施行前に比べて、どう変わったでしょう。皆さんが、これは全国1,700幾つだったかな、23の自治体に配布しまして、約4割回答を得ています。首長さんも35%ぐらい回答をしてくださいました。多様化したという量の変化が最も大きい。じゃあ、質の保障は進んだのでしょうかということ、何とも

悲しいことに、ややそう思うというのが 3 割ぐらいで、ほとんどの人は、そうは思っていない。量と質というふうにお話ししてきましたが、小学校との連携やきめ細やかに子育て支援が進んだというのは、もっと少ない。制度改革は進んだんですけども、今は、もしかすると多様化は進んだんだけど、さらにこれから質を高めるにはどうしたらいいのか、っていうことを考える時代が来ているのではないかと思います。

「(Cedep) 東大発達保育実践政策学センターシンポジウム記録」っていうのを見ていただくと、全ての調査のスライド結果を、私ども、挙げておりますので、細かく見ていただけるようになっております。例えば、子ども・子育て支援新制度ができてから、子ども未来課とか首長部局のほうに子ども何とか課ができた自治体と、それから、教育委員会のほうに全部が一括された自治体とか、そのままの自治体というのがあります。

首長部局に新設したり、教育委員会に新しく入ったところのほうが、少なくとも一元化していないとか、従来型に比べると、合同研修とか、何か制度が変わったことで、その自治体としては何か積極的に取り組もうとされている、というようなことが見えてきております。

私たちは、各園でできることと、それから更に園だけではできなくて、自治体や団体や周りのサポートが必要なことがあるというふうに思っています。こういう意味で、子どもの子育て支援新制度、今せつかなので、やはりもう一度、さらに質をより良いものにしていくためには、何が大事かを考えてみるということが必要かもしれません。

その中で、私が、フェール・ラバーズさんというベルギーの方に会ったのが、10 年ほど前にちょうどなるかと思います。子どもの側から見た時に、保育、教育の質は 0 歳から 18 歳まで同じ視点で言える。これ、私、小中高の先生の研修でも使っています。全て決まるのは、いろんな保育、教育の方法、あります。理論もあります。それを学んでおくことは、とても大事です。

でも、日々の保育で一番重要なことは、どの子どもにとっても、安心感と居場所感。これはやっぱりみんなから受け入れられているという感覚。そして、もう一つは、この文化的に価値あるっていうことを、何をもって価値があると判断するかは、周りの大人なんですけれども、そこにおいて、夢中没頭できる。しかも、1 人で没頭することもいいけれども、仲間がいるからこそ、やっぱり年齢に応じてですけれども、夢中になれる。

「夢中」だけ言っていると、ずっと夢中になり過ぎるとくたびれるので、ちょっとホッとしたり。そういう時間がうまく生活のリズムの中でできていくっていうことが、成果や将来の社会の子どもを見据えた時に、今大事になってくるんだろうということを考える必要があるのかもしれない。

ここまで、固い話をしまいいりました。お隣と「何かメモを取った？」と、ちょっと 2、3 人で見比べてみてください。「なくてもいいわ」という方は、なくて構いません。「これだけキーワード書いたわ」という方は、そのキーワードを見合ってくださいますと、いいでしょうか。で、「いいわね」と思ったら、人のを書いておくということをしていただくとい

いのかなと思っています。大丈夫でしょうか。

さっきお話ししました、今の目の前の子どもを、これまでこう育ててきたから、これでいいのよではなく、多分、もう私は2030年には後期高齢者になっているので、自分の健康と老後だけを考えればいいんですが、今0歳や乳幼児の子どもたちの将来を考えると、25年後、30年後を考える必要があります。ご存じでしょうか、OECDで、日本は何と呼ばれているか。「課題大国日本」。分かりますか。まず、借金がこんなに多い国はない、赤字だ。しかも、少子化と高齢化が同時に先進諸国で一番進んでるのが日本です。また、東日本大震災や熊本をはじめ、さまざまな自然災害というものも起こってきています。また、今海外では、移民の問題が大きくなってきています。不平等や格差も、本当に進んできています。よくお話をします、この中で、ポケベルというものを知っている人、手を挙げてください。結構挙がりますね。ポケベルって、正直に、聞いたことないという人、手を挙げてください。(数名挙手) 若い人、いや、いろんな方が。怒られるんですけど、ポケベルというものが、一時的には非常に便利とされましたが、今、スマートフォンや携帯電話によって、もう置き換えられました。また、よくお話しするのは、この場合、商品名を言うといけないんですが、「写ルンですカメラ」というのを使ったことのある方、手を挙げてください。(数名挙手) 大体、なんか年代層が見えます。今、多分使ってないと思います。デジカメというもので、変わっています。

どんどん急速に社会が変わっています。その中で、誰もがこんなにコンピューターが広がったりする社会というのを、想像できたでしょうか。未来には、車の運転も、多分ドライバーが要らなくなるだろうといわれていますし。だから、お酒飲んでも、自動運転で家に帰れるとか、そういうものを、今開発しているという話も、自動車会社さんに聞きましたが、こんな社会になっていきます。

その中で、私たちは、どういう未来を求めるのか。これは、OECDの今月の会議で出されたものです。世界的に見ると、私たちが求める未来、それは、子ども自身が未来を形づくる能力。周りから働き掛けられるより、自分から積極的に選び取る。主体性というんだと思います。他の人に決められたことを受け入れることもいいけれども、「自分で選択し、自ら形づくることのできる人材を育てたい」。これは、遊びを通して、私たちは乳幼児期に、特に大事にしていることではないでしょうか。

「Education 2030」というプロジェクトが世界的に動いています。不安定不確実な社会を生きていく、新しい価値を生み出す。そして、バランスの取れた世界というものが平和のためにも必要です。そのためには、しなやかさ、どんな環境にも応じられるしなやかさ、そして、環境を大事にしたりする持続可能性、新たなものを生み出す創造性。で、創造性は特定の人が創造的なのではなく、どの子も創造的に遊ぶことができます。そういう創造性というものを育てていくということが大事だからこそ「どんな資質をこれから育てたいのか」「どんなそのためのカリキュラムが必要なのか」「そのプロセスはどうか」とって

いうことを、今、世界中がカリキュラム改革をして、この 2030 に向かっていきます。

日本ではご存じのように、幼稚園教育要領や保育所、保育指針の改訂という説明だけを受けると、ああ変わるんだって思われると思うんですが、なぜ、その背景で、こういう議論が行われているかという、やっぱり世界的にも、今、そういうことが大事とされているのです。じゃあ、どういう姿を育てたいのということで、例えば、子どもがより主体的に他者とともに対話ができるように。そして、より深い経験を 1 つの出来事の中で育てていけるような保育、教育が大事だよねということがいわれるようになってきているわけがあります。

日本では、そういう質を上げるために、実際に、先生たちが日々子どもとどう関わっているのでしょうか。従来、文科省は幼稚園、認定子ども園が内閣府と所管が違いましたので、私どもは今回大変でした。9 万人ほどに発送をするという気の狂いそうな状況でしたが、特に私たちが大事にしたのは、認可外の保育施設の方にもお答えいただくということです。従来の認可施設も大事です。でも、私たちにとっては、全ての子どもが格差なく、落差なく、段差なく、どの子どもたちも乳幼児期にいい保育ができるようにということで、こんな形で調査をさせていただきました。この中にも、答えていただいた先生方がおられるのではないかと思います。本当に感謝申し上げます。

どんなふうに保育プロセスの関わりをしてらっしゃるか。私たちが捉える観点として、特に乳児期には「受容」「共感」「傾聴」「子どもの自発的な遊びの支援」あと「生活とか遊びのきまり」から、3 歳児クラスも、こんなことをお尋ねしました。日本では、皆さんよくやってらっしゃいますが、特に乳児期は、やっぱり「受容」とか「共感」っていうものを、とても大事にされている、ということが見えてきます。これは、全体が 5 段階なので、3 以上だったらよくやっているということなんですが、その中でも特に、子どもを受容するというケアの部分の部分を大事にされていることが見えてきました。

私たちにとっては、ちょっとショックだったのは、3 歳と 5 歳です。これは、幼稚園、保育所、子ども園、全てをまとめたデータをお出ししています。ここだけで申し上げれば、こういう関わりの質が、一番高く出たのは、認定こども園でした。それは、全国で見た時です。あと幼稚園、保育園。で、私たちにとって、あと思ったのは、認可外保育所は、一答えてくださった保育園は一ものすごく高かったです、関わりの質。逆に認可保育園より質の高い結果が出ました。なぜか。意識が高くて、で、大変なところは答えてくださらないからです、多分。でも、その中で見ていただくといいんですが、3 歳。好奇心探究心を踏まえた遊びは、ちょっと。それよりは全体を見ているかなというところが見えてきます。5 歳も同様です。

私たちは、幼児期になったら、一人一人の子どもの好奇心、探究心をもっと踏まえた遊びが重要なんじゃないか。「全体の活動」や「受容」「共感」が大事だけれども、もっとそれから「雰囲気」というものも大事じゃないか。今回調査をして分かったのは、5 歳の担任

が、各クラスを見ると一番疲れている。多分、1人で担当される人数が多いということが影響しているのかもしれない。

私たちが思ったのは、やっぱり世界的にも同じ傾向なんです。どっちかっていうと、乳幼児期はケアの部分はすごく大事にされる。それは、最も大事なところですよ。でも、もう一方で、やっぱり養護と教育の一体的展開という時に、「子どもが関心を持ったり探求したいというところを支援していく保育」とは何なのかということをもっと考えていくということがあるといい。で、やっぱり「保護者への負担感」とか、「時間がない」と、関わりの質は低くなるというようなことも見えてきているわけです。

「保育の質」ということを考える時に、子どもを中心にした時に、さまざまな観点があると思います。それぞれお話をすべきところでもありますけれども、今日は、実際の保育者との関わりや職場というところについて、主にこれからお話をしてみたいと思います。特に、今お話ししましたように、3歳や5歳では、子どもの好奇心、探求心に応じるというより、今日の活動をちゃんと先生方が準備されていることは、よく分かったんです。でも、さらに子どもにに応じていくっていうために、何が大事だろうっていうことを、一緒に考えてみたいと思います。ここまでは大丈夫でしょうか。うれしいことに、誰も寝ないで見てくださっていますね。では、次にいきます。

これは、ベネッセで、私や無藤先生が行った調査です。やっぱり受容的だと、子どもの、特に遊び込む経験が豊かな園っていうのは、先生も受容的。私が、この間『日本教育新聞』に書きました。ある園に伺ったんですね。びっくりしたの。よくあるのは、やっぱりなんか話を聞いてない子がいる時に、どう声を掛けるか。「見てる？」とか「みんなやってるよ」とか言う先生が多いんですけど、ある歌を歌っている間、後ろを向いている男の子がいる。なんか落ち着かない。どうしてるのかなと思った時に、ギターを弾きながら歌を歌っていたんです、男性の保育士でしたけど。「何々ちゃん、次、歌うよね」って、こう声を掛けられたら、ちゃんと、その子、歌うんですね、前向いて。

なんか、その園に伺って、私感動したのは、どのクラスも特定の子どもの注意するとか、要するに制約するとか、叱るっていうのが、1日いたんですけど、ひとことも聞こえない。じゃあ、そういう子がいないかっていうと、そんなことないんです。いろんな子がいるんです。でも、その時に、落ち着いている子どもを受け入れる言葉があったりします。それから、その何かやろうとしている子どもに添いながらも、それをそっちに向ける言葉を、慎重に選んでいるんだなってことを思ったんですね。そういうことが、やっぱり子どもが「もっと遊びたい」「もっと夢中になって遊ぶ」「いろんなことに自信を持って取り組める」頑張る力というのは、子どもが夢中になる遊び込む経験が多い園ほど、自信を持って取り組めるということが出てきています。これは、3,000人ほど、5歳児のクラスの保育所、幼稚園、認定こども園の先生方にご協力をいただいたデータであります。

今、中学校の学力の結果が出ているのを、ご存じでしょうか。日本は、算数や理科の学

力は高いけど、自信が極めて低い。自己有能感も低い。幼児期にこそ、こういう遊び込むという力から自信を育てていきたい。で、やっぱり自由に遊べる環境を、先生の「受容的な関わり」それだけじゃなくて、そこからより夢中になれる挑戦的な質の高い活動をするということが、子どもたちの学びに向かう力を育てる。また、園と保護者がいい関係をもって、より、そこに関わっていけばいくほど、保護者自身が子どもの意思を尊重できたりする。そういう関わりが深まっていく。こんなことも実証的に見えてきているところになります。

この辺は、そのためにも安心し、興味関心を持って、より高度な挑戦的な活動といわれるものを、私たちは保障していきたい。ということで、私は去年まで 2 年間、いろんな園長先生や実践者に来てもらって、自分の園で挑戦的と思う活動はどんなものかを、実践報告をしてもらいました。運動をやっているとか、なんか、目に見える挑戦だけじゃなくて、子どもが自分で不安と思っている壁を乗り越えたりとか、さまざまな事例というものが出てきました。この後、先生方にも話し合っていただきますが、まず 1 例、ちょっとご紹介をしてみたいと思います。

これは、ちょうど先月の武蔵野第一幼稚園の園祭りまでのプロセスを、ちょっとご紹介して、その後話し合っていただこうと思います。これは、今、一緒に研究会、子どもの創造力を育てる幼児の教育は何かっていうところで、ご報告をいただいた事例になります。これは保護者会って書いてあります。園祭りとか展示で、親が作品を見に来る。で、その前の保護者会で、どういうプロセスでそれが起こっていくかを、保護者向けに作ったスライドをご紹介したいと思います。これは、この園の園祭りで作られたもので、私はこれを見て、いいなあって思ったんです。「ひとつのポストの物語」というものです。

子どもたちは、「じゃ、ポスト作ろう。」これは、この園では 3 歳 4 歳の時の経験で、なんか立体を作る時には「設計図っていうのを描くといいよね」って。「なんだ、すぐできるよ」と、子どもたちは、この段ボールの上に画用紙載せるのが、この園らしいと思うんですけど、自分たちで机の代わりにして、設計図を描きました。最初は余裕でした。でも、実際にポストを作ってみたら、分かりますかね。傾いてしまいます。手で支えないと倒れてしまいます。で、「下がグラグラするからだ」。すごいね、知恵ですね。筒と床をテープで固定しました。「倒れないよ、付いたよ」。でも、ある子が、すぐ気が付きます。「ここ、移動できないし通れない。」じゃあ、どうしたらいいだろう。

先生方だったら、こういう時に、どんなふうに関わられるでしょうね。今度は移動できるようにということで、段ボールを敷いて、床に見立てて固定して動かすというような経験をしました。今度、倒れなくなったんです。ここは倒れないんだけど、ここが傾くんです。困りました。

この園では困った時は、特に 5 歳では、それなりの人数がおられるので、みんなで相談しようということになりました。「穴を開けて、筒を刺したらいいんじゃないか」という案

がありました。実は、前に木を作るということをやった時に、やっぱり穴を開けてしっかり留めると崩れないという経験をしていたから。ところが、穴を開けて刺してみても、グラグラします。そうすると、子どもたちの知恵ってすごいですね。先生方の園もそうだと思います。1本だから弱いんだから、3本付ければいい。」そうしたら、この子は言います「3本はポストっぽくないんだ」。そうですね。

さあ、どうするでしょう。子どもたちはいろんなことを相談します。「テープの貼り方が雑だからいけないんじゃないか。一度テープを剥がして一枚一枚きれいに貼り直そう」と言う。で、さっきより頑丈になりましたと。「やっぱりね」と喜んだんですけど、やっぱり傾くということが起こりました。

これは、全部担任の先生が、この状況の写真は撮っておられます。今度は、筒の周りに割り箸を取り付けて、段ボールに突き刺すというアイデアが出てきます。これ、裏側にし、段ボールを突き刺すようにしたものです。すごく面白いと思ったんですが、作業を始める時に、みんな、話し合いが長丁場になることが分かったと、子ども自身が椅子を持ってくる、座るようになる。

「ああ、できない、疲れた」。諦めそうになりながらも、諦め切れない、この子どもたちの気持ちに、こういう時は、私が幾つかのこういう事例を見せていただいて、いつも思うことです。「ここで保育者が出るか、待つか」、それから、「どこまで解答に近いヒントを出すのか」というようなところです。この園の先生は根気よく取り組んでいる。椅子を並べて、子どもたちが「全員ではありません、一部の子どもたちです」で、園児はどうしたでしょう。ちょっとお隣と予想を話し合ってみてください。どうしたと思いますか。先生方の園だったら、どうでしょうか。まず、「こういうポストは作らないわね」というのが、あると思うんですけど。

ちょっと聞いてみていいですか、先生だったら。

参加者 A：柱を太くしないと。

秋田：柱を太くする、先生が出すの？

参加者 A：子ども達から出るのを待ってます。

秋田：待ってます、はい。どうでしょう。

参加者 B：私は本物を見に行くのか、分かりそうな人に聞きに行くのか、っていうところがあるかな。

秋田：なるほど。まず、本物のポストをもう一度見に行くんじゃないか。それから、誰か分かりそうな人に聞くんじゃないか。いろんな、やっぱり子どもが持っている知恵を生かしていくわけですね。このいい瞬間の写真が撮れてない。分かります？そういう瞬間って、先生のいない場所で起こるんです。何をしたと思います、これ。その前に別の実践で、こうやってカップを切ってお花にするという、こういう経験を子どもたちがしているんですね、こうやって開くと。それをどこかのクラスがやってるのを見たのか、分からないんです。一番いい瞬間は、担任は見えていなかったと。でも、分かったのは、こうして広げて、

できるだけ底面積を広げて押さえばいいということに、子ども自身が気付いて、もう担任が見た時には、こうして開いて子どもは付けていたって。

よく言うんです。一番いい瞬間って見えないんです。でも、試行錯誤している時って、実は大人の目がないからこそ、いろんな工夫をしている時があるかもしれないと、私は、これを見ながら思いました。こういうふうにして子どもたちはやって、こうして、安定的なポストが1つできると、面白いですね1つ作れたらOKです、ミニポストを量産して、これなら崩れないポストだっていうことが分かったと、もっといろんな所に立てたいと考えます。

私自身は、実はこれをイタリアのレッジョ・エミリアというところで働いていた伊藤史子さんたちと一緒に見たんです。そこで言われて、はっとしたの。こんなに段ボールで遊ぶ国は、他にない。なぜなら、日本の段ボールはすごく質がいい。それから、容易に手に入る。そして、園のものとして、ガムテープとか、それは大人が使うものじゃなくて、子どもが使うものとして、静岡の園全部がそうされてるか分かりませんが、「こういうのってないよね」って。でも、今、ご存じのように、新聞をご家庭が取らなくなって、新聞紙が無くなってきたり、それから、障子紙なんかとかお花紙なんかも、保育ではよく使うんですけれども、だんだん時代とともに変わっていくかもしれない。

でも、こういうものを作っていくっていうのには、実は、私たちの国の文化の中に、たくさんあって豊かで工夫ができる、そういう素材を丁寧に、あらためて気付किながら、大事に使うということも必要なんだなって。何か話は盛り上がりました。

今度は、当然のことながら、ポストを作ったら手紙が書きたい。そうですね。いっぱい子どもたちは手紙を書いたんです。「そうだよね」って。ゴールが見えてきて、手紙を40枚作ったの。ここが面白かったんです。その園の文化とかあると思うんですよね。「切手に合わない」と、子どもがつぶやいた。これも、私もいろんな園に伺って、お手紙ごっこで、切手を先生がピンキングとかで貼って、「これ、切手よ」とっていう園もありますよね。それから、子どもがシールでやっている園もあれば、絵で描かれる園もあればいろいろです。

この園は、見てください。切手は量産できない。なぜなら、切手というものについて凝り始めた子がいて、記念切手を見ると、図鑑などで、非常に精緻な、実は切手というものは、非常に、あれ、プロが描いているわけですね。それを見て、みんなで集まって凝ってるわけです。だけど、子どもたちは40枚、やっぱり図鑑を見ながら、譲らず作ったんですね、手を抜かずに。こういうものって、やっぱり先生が、「もっとサッサとやれば」と言うか、子どものこだわりに付き合うか。「こだわりに付き合えば付き合うほど、子どもたちは、でも、何が大事で何が手を抜いていいかを、子どもなりに考えていく」、ってお話がありました。

いよいよ当日になります。朝の展示物、こんな形で、おうちの方もメッセージをあげてくださいねって、こんなふうに書かれています。そうすると、こんなに親や他のクラスの

子がメッセージを書いてくれて、こんなふうに展示をしていく。いろんな園が、多分、この11月、12月、展示とか発表会とか、2月ぐらいに向けて、いろんな活動をされていくんじゃないかなって、私自身は思うんです。

私が、この園、面白いと思ったのは、既に10月の終わりに園祭りやってるんですが、9月ぐらいから、ずっと話し合いをしながら、長期戦でやってらっしゃいます。ずっと毎日毎日、やってるわけじゃありません。でも、私は、そういうことが大事だと思います。面白いなと思ったのは、「園祭りで、どうする」って言ったら、子どもは、何か作りたいものが出てくると先生は思ったと。でも、保育者と実際の子どもの「ずれ」というものを、いつも意識しながら記録を取っています。そうすると、壊れないもの、大きいもの、小さくてかわいいものとか、何作りたいじゃなくって、大きさとかが最初に出てきた、ということなんです。で、しっかりしたものを作ろうと。

これが面白いなと思うのは、この園では、こうやって話し合ったものを、ホワイトボードなどを使ったものを、全て写真で撮ってあるんです。それで、要するに、どうやって進んでいったかが、全部、これを見ると分かる。で、それを保護者会に提示されることによって、「子どもってこんなふうに考えながら、最後、こんなふうに作られていたんですよ」って報告される。で、何作ろうかっていう時も、「設計図を描こう」って言い始め、全員が。1人、2人描くと思ったら、みんなが描いてしまったというのが、担任の意見でしたけど。こんな設計図を見て、どんなものを作ろう、と話し合ったそうです。

これは、今、お話ししてるのは、こういう一斉の保育をしてほしいと言いに来てるのではありません。でも、みんなが力を合わせながら、園だからこそ共同して高めていくために、子どもの姿が見えるんですが。背景で、「何を保育者が支えているのか」「園が何を認めているのか」わかります。こんなふうに、机の上に子どもを上らせてどうか、という園もおありでしょうし、これもありよねという園もあるし、そこに園のルールというのがあります。私も、その園のルールを見せていただきながら、その園のやっぱり雰囲気や価値観を決めていっているなと思います。

こうやって話し合いをしていくんですね。最初に煮詰まると、私、面白いなと思ったのは、だんだんやっぱり譲れない、子ども同士が譲れない。たっぷり時間があつたはずなのに、結局何を作るかって、木の家しか決まらない。そうすると、子どもが振り返りをするんです、なんで決まらないのか。そうすると、面白いですよ、「けんかしてたからだ」とか、「隣の人を触っている人がいたから」。そうすると、反省が出る。けんかをしない。「隣としゃべらないで」みんなに言う。隣の人が触っても気にしない。譲り合うから、「うるさい」って、みんなが言わない。で、うるさくなったら、1度、自分が黙ってみる。

この、一人一人似てるようだけど、先生が「静かにしなさい」って言うのではなく、みんなが自分の言葉で表現をしているものを、保育者が聞き取りながら、そこでルールを自分たちで決めていく。こういう、そのルールを、1つ、やっぱり園で入れていく時にも、自分たちで考えながら、なぜ聞かねばいけなかったのかという必然性を育てていくのか、それと

も、これはルールだから守るのよとしていくのか。私は、それは価値観や揺らぎや時間があると思いますが、5歳後半の姿としては、こういう姿があるといいな、というふうに思います。

これも、家を作ろうという時に、とても面白かったのですが、みんなが作ろうと思って作ってるんだけど、分かりますか、みんなそれぞれに勝手に作ってるので、家にならない。それで、全然できなくてばらばらだって、みんながけんか寸前になる。で、サボってるんじゃないけども、ふざけてるわけじゃないんだけど、イメージが協力できない、共同できない。「どうしてうまくいかないのか、みんなが動き過ぎるからじゃないか」って。「もうちょっと分業してみよう」という発言が子どもから出てきています。

翌日、一気にこうして作られます。私、すごいなと思ったのは、こうやって働き始めると、組み立て場所が混むと、前回の失敗があるので、今度はテープを渡すとか回収する動きとか、後ろのバックヤードに回る子どもが生まれてくる。で、みんなで一緒についていうのは、何でも全員が同じじゃなくって、1つの目的に向かっていくんだねって、子どもが協力する。多分どの園でも。こういう姿っていうのを、いろんな活動を通してやってらっしゃる。その1例だと思うんですけども、その時に、やっぱり「1対1ではなくて、子ども同士が、集団で一緒に学び合うからこそできる姿は何なのか」ということを、特に「保育の質」というところを考えていく時に必要なんじゃないだろうかと私自身は思います。これなんかも、順番に話すことにしようって、仕切る子どもが出てきたりしています。実際にこんな形で、子どもたちが話し合いをしているんです。

これで無事園祭りは終わりなんですけれども、終わりでハッピーエンドだけではありません。楽しかった園祭りが終わり、子どもたちが元気に登園してきました。祭りの後の幼稚園は、賑やかさの名残があちこちにあり、確かに祭りが終わっていて何とも言えない空気が漂っています。そこで、登園してきた子どもが何をしているか。パトロールをしている。幼稚園の中がお祭りの後、どうなっているのか。あの部屋は、この部屋はと、やっと思て、どうすると。お祭りは終わったんだけど、自分たちはどうしようか。生活を、今日からの生活をどうしようかと、子どもたちが考える。「自分たちの生活の場」と、はっきり感じている。だからこそ、このお祭りの展示のままでは置いておけない。そこを、子どもたちが考えるというような事例であります。多分、始まりから終わり、遊びの最後を子どもがどのように終わらせていくのか、そんなところも、日々、先生方、考えておられることではないかと思います。

今日、少し長めの事例を、今、お話をしてきましたけれども、今から3人、ちょうど3人か4人が1列にお座りですので、今の事例をご覧になりながら、この事例の感想だけではなく、挑戦的な保育とか、よりその子どもが探求できる保育のために何が大事なんだろうということを、3分で話せるはずもないのに、無理なことです、3〜4分、ちょっと振

り返ってみてください。どうぞ、お始めください。誰も 1 人にしない周りの配慮で、お知り合いじゃない方も、一緒に輪に入って話し合ってみてください。

— 話し合い —

秋田：お話は尽きないところだと思います。3 分で切るというのは、本当は、研修なら、これで 90 分かもしれません、申し訳ありません。今、3 人ないし 4 人でお話をさせていただきました。私はよく申し上げています。良い教師と掛けて何と解く、という謎解きをご存じですよ。答えは何だかご存じですか。いろんな、知らない方も。良い教師と掛けて。これは、昔、静岡大におられて、今、横浜国大にいられる高木（展郎）先生に、私は学んだんですけれども、良い教師と掛けて、何と解くと。答えは“盆栽”松と菊が多い。分かりますか。でも、いろんな研修会で、もっとたくさん出てきました。“寄せ鍋”っていうのもありましたね。何、何でもありって受け入れて、味わえるっていうの。“遠距離恋愛”物理的に離れていても、信じて心がつながっている。全員の子どもといつも接触はできないけど、遠距離恋愛のように信じている。若い保育者の人しか言えない言葉だなと思いながら聞きました。

今、3～4 人でも挑戦的とか、今の事例を報告し、感想を話し合ってくださいました。今から少しマイクで伺います。お願いをしたいのは、自分の感想を言う必要はありません。今、グループで、この時間に話し合って、他の方から聞いて、なるほどとか、共感したことを教えてください。と、こういうふうに何度か言っても、自分の感想しかおっしゃらない方も、特に園長研修で多いんですけれども。そうではなく、数名のグループで話し合われて、ご自分になるほどとか、他の方から伺って聞いて感じたことを、ちょっとお聞かせください。

ここ、熱心に燃えていたので。

参加者 C：義務教育だったものですから、私も。今、生活科と同じでっていうことで。でも、生活科のほうが遅れてる場合もあるよっていうことをお互い見ていくと、幼稚園から見るとっていうふうなお話もあって、きちんと連携する必要があるなというお話をしました。

秋田：ありがとうございます。小学校の方も来てくださって。生活科と、例えば幼児教育だと、同じものを栽培しても、幼児期にはそれが育ったということの喜びですけれども、例えば小学校 2 年生の生活科では、お世話をした自分の姿が振り返れるところが、単に育ててるだけではなくて、それが小学校の生活科で育てたいところですね。その辺りも同じような活動をしながらも、少しずつ願いが違う。でも、一緒の部分も、子どもを中心にする事で話し合うことはできる。すみません、いいでしょうか。

参加者 D：本日の話の中で、今、秋田先生が言った独自の園とルールっていったところで、

やっぱり環境によっても、例えば木登りが OK な園もあれば、そうでもないところもあったりですので。そういったところで、そういう環境っていったところも、その保育の中では大事なんだなっていういろんな話が出ました。

秋田：ありがとうございます。何を OK とするかっていうのは物理的なものから、保育の時間や、目の前のお子さんによって違ってくるんだけど、その何らかのルールっていうなものを見ていくということが必要かもしれない、いうことを、今、お話しいただきました。

あるところでも書きました。私の大学の近くの、ある附属幼稚園で、すてきな保育を見せていただく。2 園を見せていただいたことがある。その 1 園で、とても面白い観察をしたことがある。それは、子どもが、たまたま砂場で遊んでいた。そしたら、友達が「おーい」って、こっちから呼んだんで、「何だよー」って言って、その子が言って、「おー」って、こっち側のガラス越しの子に砂の付いた手でやったら、ガラスに砂が付いたの。そしたら、あって、その子気付いたんですよ。また、何とかって言うからやってきて。今度、すごいですよ。ちょっと丸めた団子みたいな持ってきて、ガラスにペシャッとやるわけですよ。その子にとっては、ガラスに、泥が湿っていて、付くっていうことに、偶然に気付いたんですね。私も、そこの園のすごく、みんなすてきだなと思ったんです。先生が、そーっと静かにタオルを持ってこられて、「これで拭きましょうね」とおっしゃったの。決して駄目とはおっしゃらない。そこが、やっぱりその園の素晴らしさだな、と思うと同時に、ああ、これで、この子の試行錯誤は終わったな、って思ったわけです。

たまたま、別のある市の園に行った。類似の例で、ある子が投げたら、それがペシャッと崩れるのと崩れにくいのがあった時に、そこの先生が、これはガラスじゃないんだけど、板を 1 個立てた。そしたら、板にバーンっていう事例で、子どもがどういう土とか砂だったら、板にバーンってくつつくのかつぶれるのかをやっていました。この板にバーンなんて、やらせる園があるんだって、その泥を投げる子どもたちを見て思っただけです。片方では、きれいに拭きましょうねって。で、片方では。それは、どちらかが悪いとかいいとかではない。でも、そこで、狙いとか、その子の試行錯誤をどこまで大事にするかですよ。

先日、ある、また別の附属幼稚園の公開に伺った時も、面白かったのは、セロテープが木の台になっていた。子どもは何が面白かったかっていうと、セロテープ台の中にビー玉を入れると、反対側から出てくるっていうことに気付いて、それを何度もやっていた。そしたら、先生が、さりげなく来られて、「セロテープが壊れちゃうわよ」って、上に置かれたの。それで、その子の試みは終わったの。

と思ったら、そのクラスは 5 歳児が複数のクラスを行き来することができる。それで、私が、たまたま、ある別のクラスを見に行ったら、そこにも面白い子がいて、写真もあるんですけど、セロテープでのさばっている子がいる。よく見たら、その、さっき禁じられ

た子が、別のクラスに来て、やっぱりビー玉を入れている。それで、ビー玉を入れて、その次に、今度割り箸を反対から入れると、ちょっと出たりするんだな、ストローとか。そういうことを何回か繰り返している。その、試行錯誤をやっている。

そういうのを見た時に、多分、子どもの試行錯誤と、保育者がこう使うものというルールとの間ってというのは、常に葛藤があります。それが、ある時にはやっぱり禁じなければならない、理由を分かってもらわなければならないものもあるし、この辺りって、子どもの日々の生活の中で難しいなって、いつも思うわけです。どれがいいとか悪いじゃなくって、実態を見てると、子どもの試行錯誤って、意外にそういうところとか、先生の見えないところで、いろんなことを、子どもは学んでいる。それを先生が知っていることは大事なんだけど、全て写真に撮って記録を作ればいいというものではないと、私は、実は思っている。写真の研修を始めたのは、忙しい先生たちに、研修時間が無くてもできる研修を考えてほしいって言われて、3～4人でデジカメ1枚で出来事を語れるっていうところから、アイデアは出たんです。けれども、時に、この頃誤解もあるので、お伝えしようと思います。

今日最後の部分で、リーダーシップということです。私は保育や教育の質というのは、文化とか地域性、かけがえのなさがあると思っています。今後も、恐らく大都市部で、あるニーズのある幼稚園は幼稚園として残っていくところもあるでしょう。それから、非常に過疎になっていって、本当に小規模であるからこそ、全体として、こども園として成り立っていく地域もあるでしょう。それは、どれがいい悪いではなく、その地域で、やっぱり果たすべき役割というもの、その園のかけがえのなさ、私は、その地域の素材などを大事にしながら、食育も含めですが、考えていくことが教育の質としては大事だろうと思います。

そして、専門性の誇りというものを持って、各園が、その各園らしい言葉で表現をしていく。その時に、時には ICT やデジタルのものというのも、思いを伝えたり、人とつながる1つの道具としては、使えるようになってきているのではないかと、っていうふうにお話をしています。そして、地域や保育所も含め、わくわく発見と書いていますが、わくわく感とか、新しい着想が湧く一方で、悩みや困惑を共有できる、そういう園のチームワークをどうつくっていくかということが、私は重要だと思っています。よくいろいろなところで申し上げます。

一番よく分かるのは、香川県に行くと、うどんのごっこ屋さんがすごくたくさんあるとか、それから、関西に行ったら、明石焼きを作ってる子がいるとか。静岡は何でしょう。やっぱり、そういう地域の中で、職員と子どもが一緒になって育っていく。これは、さっきお話ししようと思ってやめたデータですが、見てください。世界で、先進諸国の中で、就学前の幼児教育担当者が、日本ほど、30歳以下の人の割合の多い国は他にはありません。韓国が似ていますが。これは少し、やはり専門家として、人が育っていくとは何かという

ことを、私たちは考える必要があるのではないかと思います。

そこで、今日終わりのほうのキーワードの 1 つです。階層的なカリスマの先生も重要ですが、分散型、協働的リーダーシップということが、今、世界的に、乳幼児のところでは、よくいわれるようになっていきます。組織のどこにでもリーダーシップはいます。それぞれの人々が、ご自分の強みを生かしてやっていくということです。しかも、1 年目、2 年目、3 年目辺りを超えると、少しいろんなことが見えてくる。その後、自分はどういうことを大事にするのかということ、を、ぜひ、お考えいただけるといいと思っています。

この翻訳本が出るとはいますが、リーダーシップということを、イギリスでは、マネジメントと、分けています。要するに運営とか経営じゃなくって、教育のために、1 つは、こういうことが、今大事だよと方向付けをすると、有効に、うまくコミュニケーションが。忙しいですけど、その中でうまくできるようにする。だから、やっぱりチームとして、保護者とか、やっぱり園の文化を共同的につくる。そして、他者を力づけるとか、励ますとか、やっぱり、「あなたがいるから、こういうふうにできるよ」って。よく、うまくいってる園って、皆さん、こうおっしゃるじゃないですか、「職員の人がいいんです」とか、「このチームがいいんです」って。で、うまくいかないところに限って、いろんな愚痴を、私は聞かせていただくことになるわけですけど。

そういう部分と、教育のリーダーシップとしては、やっぱり学びを促していく、振り返りを促していく。これは、園長先生や主任の先生がお考えになることは、とても大事ですが、私たち、調査をすると、園長のリーダーシップと主任のリーダーシップも違います。当然のこと、園長はもっと大局的にとらえる。主任の人は、もう少し明日の保育をどうするかとか、そういう具体的な若手の指導支援。でも、私は、一人一人が、こういうことを引き受けていくということが大事ではないかな、と考えております。園長先生のリーダーシップが高いということが、人間関係の負担を減らし、労働環境の負担を増やし、やる気が出てくる。当たり前と言えども当たり前。でも、なかなかこうはうまくいかないところが難しいところだと思っています。

お話をしているのは、研修でも何でも、よく話し合いといわれますが、うまくいっている園ほど、話し合いだけでなく、聞き合って、つながっていく関係が大事ですね。いっぱい付箋を作って、いろんな意見が出るんだけど、それがつながらないままに、たくさん出した作品で満足してしまったら駄目ですよって、お話をしたりしています。やっぱり、みんなのは、いろんな取り組みが、担任の先生も、よし、やってみようというふうと思うところとつながっていくんじゃないかと、私は思って、よくこの言葉を紹介しています。「人々に学び、人々と一緒に計画し、人々が持っているもので始め、人々が知っていることの上に築きなさい」。

リーダーが真に優れていれば、終わってみると、人々は口々に、こう言う。このかぎかつこの中は何でしょう。隣とつぶやいてみてください。結構いいところまで言葉が出てい

る方も、多いように思いますが。ほぼびったりという方、手を挙げてください。そうですね。これ、クラスの子どもたちもそうかもしれませんし、職員集団もそうかもしれません。

私は、前に、登山家の人の話を聞いた時、そうかと思いました。いわゆる、エベレストとか有名な山に登る時には、必ずシェルパさんが、荷物を一緒になって運んで、山に登るわけです。いい、その補助のシェルパの人というのは、ぎりぎりまで、実は一番重い荷物持ってるのは、彼ら、ガイドなんですよね。で、途中まで上がるんだけど、最後の頂点のところに行く時だけは、その登山家の人を先に上げるんだそうです。分かりますか。それによって、みんな、自分が登ったって旗を立てるんだけど、実は、そこまで黒子で、ロジをして荷物を持ったりしているのは、一番、その地元の山をよく知っている人たちが支えているんですよね。

それと同じところで、多分、リーダーシップもそうかもしれません。保育も、そうだと思います。やっぱり、いろんなところの環境や雰囲気や、その辺りの黒子になれる、お互いが支え合うという関係を、どうやって忙しい職場の中でつくっていくか。その鍵の1つは、まさに子どもを中心にして、子どもの育ちの喜びや、困った時にも、こんなふうに変わってっているという、恐らく子どもたちの関わりの姿を語ることでは、その喜びはないんじゃないかと思います。

そういう意味で、子どもたちをよく見て、こんなふうにつながっていったそれぞれの子どもの独自性は、こんなところにあるということを、それぞれが丁寧に見合いながら。そして、それを、その語りをお互いに聞き合いながら、「よかったね」と言う。子どもの学びの物語や、育ちの物語に聞きながら「じゃあ、こんなことができるかな」と語り合うというようなことが大事な、と思っています。

私が、いろんなところで使う写真なので、ご覧になった方も多いと思いますが、私、この写真、好きなんです。これ、私、すごいなって。これ、宮前幼稚園という、亀ヶ谷園長先生が撮られた写真ですけど、運動会に出発する時に、「自分が一番速くスタートできると思う格好で走ってご覧」と、声を掛ける園長の下だから生まれるのであって、「こうやって走るんだよ、せーの」ってやったら、多分こんな動きは出てこない。別に、私は、スタートをこうしてほしいというのではなく、さまざまな表現の中に、子どもたちの尊厳が、考える、私たちには思いも寄らないような、いろんな可能性がある。それを、やっぱり、どのように生かしていくことができるのかということが、保育の質であり、子どもの、その、その子らしさが現れていくところなんじゃないかなって、私は思うわけです。

そういう意味で、それをまた共有をしていく。その時に、子ども自身も、子どもの写真に誇りを持つことができる。それから、保護者にそれを伝えたり、それから、地域と共有をしていくというようなことも大事ですよね。ということをお話をしてきました。子どもは、例えば、これは、ある園ですけども、子どもの気付きということ1つを取っても、気付きの質って、いろいろある。多分、小学校や高校までそうです。気付くってということ

が、課題の設定とか、要するに、問いの始まりとか、一番重要なところでしょうね。

子どもが、乳児期から、本当にいろんな気付きをしています。その気付きの育ちっていうものだけを丁寧にメモを取った園が、こんなふうに「3歳、4歳、5歳って、こんなに違うんですね」って見せてくださったりしています。これは、その園が、こんな記録を出して、これ、「気付きの木」というのを作ってる園ですね。このごろは、「気付きノート」っていうのに替えて、こんな保護者と一緒に気付きを共有されておられました。また、ここでは、保護者からもコメントをもらいながら共有するというようなことをされていました。

私はこのごろ、見える化ということで、「写真」というのを、この数年言ってきた、感じていることがあります。見えるのは、視覚的な情報と流れなんですね。でも、これ、私が、今入っているあゆのこ保育園というところで、随分前から写真をやっていたんで、この頃、こういうことを始めたんです。これは、今までだったら、子どもの遊んだ道具は、子どもの遊び活動が終わったらしまってたんです。でも、保護者が迎えに来る時に、ちょっと、今日の活動で使ったマラカスですって、子どもの写真と同時に置いておいたんです。それから、例えばこれも、こんなふうに、いろんな粘土作ってみるんですよ、ってお見せする。

やっぱり写真で見ると、実際に触ってみて、見たのでは違う。そうすると、ああ、これなら、うちでやってみますって。これもそうですね。何気ない、「上から下から、こんなことして、いろんな布で遊んだんです」って。その時に、「ほら、この布とこの布違って、こういうんでやってみたら、子どもが喜びました」とかって。

これを、今までは貼ってない掲示だけだったんですね。そうしたら、「へえ」って言うだけだったんです。でも、この布を貼ったりしたから、「大きいシートを、こんなにしたら、子ども、喜んだんですよ」って置いてあったら、保護者の方が、「これなら、うちでもできます」って、こうおっしゃったり。それから、「うちで、こんなことあったんですよ」って、今度、物を出したら、保護者が、「うちでは、こんなことしました」っていう声が、より聞こえてくるようになったと、その関わった保育士さんたちが言ってくれたんですね。

やっぱり、何でしょう、目で見ること大事ですけど、なんか、ああ、親もわくわくしたり、こんなこと、やれるかもしれないねと、お互いに考える触覚とか味覚とか、いろんなものの共有というのが大事で。写真は、写真で大事なんです。だけど、写真だけでは補えないもの、それは、やっぱり生のものだったり。それからこの園では、ある時期、子どもが面白い踊りをしてたので、それだけは、iPadで踊ってる風景を、ちょっと帰りに押すと見れるようにしてありました。そうすると、親子で一緒に踊ってくれたり、始まったり。何でしょう、やっぱりそういういろんなアイデアというものがあることが大事なんじゃないかと思っています。

保幼小連携もそうです。地域の中で、この園でもそうです。お芋掘りに、いつも行ってる地域の何とかさんが、今度、こうですっていう写真なんかも掲示することで、保護者が、

その地域の人とつながっていくことができたりしています。やっぱり少子高齢化社会の中で、園が、私たちの町の園になる。

これは能登半島で聞いた話です。経営が赤字になったある保育園が閉じました。そしたら、何が起こったかという、保育所のある別の町に若手の世代は移ります。高齢の人たちも介護を受けるのに、一緒に移ります。その村は文化が無く、とうとう廃村になっていきます。それに対して、頑張って、今度こども園で、ある 3 園目は閉じなかったんです。そうしたら、保育士さんが言ったそうです、「私たち、まだここで働いていいんですね」って。そこで頑張っていると、やっぱり園があると、地域ならではの文化や祭りや、いろんなものが残ってるんですね。

私は、今、この年になって分かるのは、私は、子ども 2 人を地域の保育園で見てもらいました。子どもは、もう 30 半ばなので関係ないんですが、実は、その保育園で一緒におむつを替えた仲間のお母さん、それから、小学校の PTA で一緒にやったお母さんが、私の高齢者ネットワークなんです、一番。地域の隣近所だけじゃなくって、その時子どもを介して、地域の人と一緒に繋がった、その人たちが異動しない限りは、ずっとそこで、一緒にそれから生きていくんですね。園や学校の先生は異動します。でも、やっぱりそこで、親が一番最初に、親として地域で生きていく“輪”をつくりだしていく。その最初は、保育所や幼稚園、こども園だと思うんです。そういう意味で、やっぱり園が私たちの町の園になるように、子どもや保育者がつながっていく。

これ、その地域の文化という、香川で、「しばきごま」というのがあるんです。面白いですね。こういうおじいさんが、がぜん元気が出て、交流会で来てだけじゃないの、いつ来てもいいってことになっていると、生き生きと、そのお年寄りが来てくれたり、こま対決をしてくれたり。この人も面白かったですね。このお婆さんは、普通にお婆さんって言ったら失礼ですけど、おばあちゃん、墨絵とか、あと七宝とかをやってらっしゃるんですけど、ここで園の方針が、「来たい時に来てください、ちょこっと寄ってください」って。

今までだったら、年間交流で、地域の方とか、敬老会で、何日に何とかします。そうじゃなくて「いつでも来てください」って、先生たちオープンなんです。もちろん子どもの活動で、できない時もありますよって。そうすると、コーナーのところでやりたい子が、いろんなことをやったりしていました。こうやって地域の文化っていうのは、多分、静岡は、静岡でも、いろんな市によって違いがあると思いますが、そういういろんな方も、また、子どもを中心に、このお婆あさんも、また生きがい、もらってるんです。

01 : 20 : 01

これ、私の同僚の遠藤利彦さんの専門なんです、**“Other-Oriented Hope”**という言葉があります。他者に向けられた希望なんです。園っていうのは、まさに子ども、子どもは未来の希望ですね。それは誰にとっても希望なんです。わが子だからじゃなくって、やっぱり子どもたちが育っていく。だから、保育所が育っていく。お互いに、なんか育ち合

っていくっていうことに希望を感じられる、そういう社会をつくっていくってことが、私は、多分保育の質を上げていく。それは、客観的にチェックリストで何点だとか、なんだったということではなくって、そこが大事なことなんじゃないかなって。

私たちの町の園になる。そのためには、何にこだわるの。今日は段ボールを出してみましたが、その素材や出来事、誇り。これは、例えば、園祭りが 1 つの大きな行事でした。行事が多過ぎるのは問題ですが、でも、何にこだわって、その園らしさがあるのか。それを誇りにしながら、保護者とか地域の人と一緒に考え、希望とか誇りを育てていくということが、私たちの町の園になっていく時に大事なことはないか、と思っています。

そのためには、「ちょっと時間を変えてみる」「身の周りの環境を変える」「付き合う人を変える」これが、人が変わる 3 つの条件といわれています。研修時間、ないかもしれませんが、ある園では、15 分あったらやれますっていう園長先生の熱い思いで、15 分でできる研修を繰り返したりしているところもあれば、ちょっとした環境の工夫もあります。幼・小連携もそうです。保・幼の連携をやっているところもあれば、さまざまな、ちょっと違う人が入ってくれることで見えてくることもあるのではないかと思います。

私の好きな言葉と、あとは、今日はしゃべり過ぎてしまったので、ちょっと黙って、あと最後に子どもの姿を見ていただこうと思います。私の好きな篠木眞さんの本に、『子どもは……』という写真集があります。すごいよ、これ。前、絶版になったの。本が無い、本が無いって、ずっと言い続けたら、本屋から本が出たんです。

で、新出版なんですけど、「1 個の石でも、1 枚の落ち葉でも、その子の個性が選んで拾ったものを否定する権利は誰にもない。その子が選んで拾ったものに声を感じ、そこに共感してくれる大人や社会があることで、未来に生きる子どもたちは、そこに新しい出会いを見つけ、きらびやかな命を吹き込むことになる。子ども時代に、心の池が満たされると、生涯枯れることのない泉になるでしょう」という、この篠木眞さんの言葉とともに、今日は篠木さんの今までまだ皆さんが見たことのない別バージョン、いろんな篠木さんの写真があるので、今日は、1 つこれをご覧いただこうと思います。

————— 写真の映像 —————

これは、『陽だまり』というタイトルの写真の 1 群から見ていただきました。園という場所が、常にいろんなご家庭のお子さんがいますが、子どもたちにとって、日だまりとして、そして、温かな未来をつくる場所になってほしいと思っています。今日は、外の目、内の目ということで、客観的な海外の動きと、そして内なる園の実践を、少しご紹介をさせていただきました。県立大学 30 周年ということで、雑多にお話をしてしまいましたが、子ど

もを大事にする保育者の養成ということが、今問われています。今後ますます静岡県立短大の子ども学科が発展することを記念して、私の講演は終わりにさせていただきたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございます。

副島：秋田先生、どうもありがとうございました。私ども、保育者は、保育に携わる者は、子どもたちの可能性を信じて、見て、語り、そして、いつか伝え合うことで、またいろいろなアイデアを出し合うことで、子どもたちの発達を促すこと、それから、地域のつながりというものを促していくということが大切だというふうに、私のほうは感じさせていただきました。どうも、貴重な講演、ありがとうございました。